

## 自己点検・評価について

① プログラムの自己点検・評価を行う体制	医学教育の質向上委員会
(責任者名)	竹村 洋典
(役職名)	医学部 教授・基幹分野長
② 自己点検・評価体制における意見等	
自己点検・評価の視点	
自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等	
学内からの視点	
プログラムの履修・修得状況	<p>本プログラムは、令和6年度に入学してきた学生が対象となっている。科目としては、「AI・データサイエンスと医療」(1年次)、および、「AI・データサイエンスと医療」(2年次)を履修する必要がある。本プログラムは必修科目となっているため、すべての学生が履修している。</p> <p>修得状況としては、令和7年度の、「AI・データサイエンスと医療」(2年次)を履修している115名が修了することにより、初めての修了者がでる予定である。</p>
学修成果	<p>令和6年度の「AI・データサイエンスと医療」(1年次)については、科目のGPA(Grade Point Average)が2.92であった。これは他の科目と比較して高い値であり、全体的には成果がでていると考えられる。</p> <p>令和7年度の「AI・データサイエンスと医療」(2年次)は実施中であり、成果についてはこれから点検を行うが、令和6年度の「AI・データサイエンスと医療」(2年次)はほぼ同じ内容であり、科目のGPAは2.22となっている。1年次の内容よりも、内容が深化しているため、GPAは低めになっていると考えられる。</p>
学生アンケート等を通じた学生の内容の理解度	<p>科目の評価は提出物などを基におこなっているが、別途、「講義復習テスト」として実施しているe-learningがある。この正答率を確認するかぎり、AIの応用例を示した「臨床応用」という講義の理解度は、他の分野に比べて低いことが明らかとなっている。</p> <p>アンケート(設問「この授業内容を理解できましたか」)によると、学生自身が感じている「理解度」は80%を超えており、授業の満足度は高いと考えられる。</p>
学生アンケート等を通じた後輩等他の学生への推薦度	<p>アンケート(設問「この授業内容を理解できましたか」)によると、学生自身が感じている「理解度」は80%を超えており、授業の満足度は高いと考えられる。</p> <p>また、他のアンケート(設問「この授業で興味や関心が深まりましたか」)によると、興味・関心が深まったと回答した者が80%以上であり、後輩等他の学生への推薦度も高いと考えられる。</p>
全学的な履修者数、履修率向上に向けた計画の達成・進捗状況	本教育プログラムは、必修科目であるため、毎年一定数の履修者がいる。そのため、5年後である令和12年度には履修率が100%を達成する予定である。

自己点検・評価の視点		自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等
学外からの視点		
教育プログラム修了者の進路、活躍状況、企業等の評価		本プログラムが、令和6年度から開始されていることから、修了者はいない。本学は医学部であり、約90%が医師となり病院等へ就職する。本プログラム修了者が卒業した後、就職先の施設からのフィードバックを得る予定である。
産業界からの視点を含めた教育プログラム内容・手法等への意見		本学の学生は将来、医師や看護師として臨床にてAIを適切に活用することが求められるため、より実装・運用の視点を重視している。そのため、本学メディカルAIセンターおよび、連携関係にある株式会社ナインアワーズ(本社:東京都千代田区、代表取締役CEO:松井隆浩)、株式会社スターージェン(本社:東京都台東区、代表取締役会長:鎌谷直之、代表取締役社長:加来淳一)からの提言を、統合教育学修センターIRチームにて集約する予定である。加えて、将来的な応用展開を見据え、早稲田大学と共有する共同研究拠点TWInsの研究者からも意見・提言を併せて収集し、教育プログラム改善に反映する計画である。
数理・データサイエンス・AIを「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」を理解させること		医学部ということもあり、講義や実習で取り上げる内容を医療分野とすることで、「学ぶことの意義」を理解させている。特に、医師は電子カルテや医療情報データベースなどを活用する必要があり、現場では医師をサポートするAI技術も登場している。現場で使われているものを教材として活用する工夫を、毎年検討して実施している。
内容・水準を維持・向上しつつ、より「分かりやすい」授業とすること  ※社会の変化や生成AI等の技術の発展を踏まえて教育内容を継続的に見直すなど、より教育効果の高まる授業内容・方法とするための取組や仕組みについても該当があれば記載		積極的に実習・演習を取り入れている。例として、公開されている画像データを用いて、AIによる画像分類について学ぶ演習、学んだ医療統計を、本学の健康保健組合の匿名化データについて適用する演習などを実施している。実際の医療データを用いることで、具体性が増し、理解が進むと考えている。